



せ た て い じ

瀬田貞二 (1916～1979)

戦後日本の児童文学界を牽引したひとり。実質的な編集長として『児童百科事典』全24巻(平凡社、1951～1956)を刊行したのを皮切りに、児童文学の世界で様々な業績を残した。『かさじぞう』や『ねずみじょうど』などの昔話の再話、『3びきのやぎのがらがらどん』、『おだんごぼん』をはじめとした外国絵本(以上、福音館書店)や、「ナルニア国ものがたり」(岩波書店)、『指輪物語』(評論社)に代表される児童文学の翻訳、『きょうはなんのひ?』などの創作がある。昭和30年(1955)には石井桃子らと「子どもの本研究会(ISUMI会)」を発足し児童文学の研究を進め、『子どもと文学』(共著、中央公論社)を出版する。ほか、講演録『幼い子の文学』(中央公論新社)、児童文化の歴史を紐解いた『落穂ひろい』、評論集『絵本論—瀬田貞二子どもの本評論集—』『児童文学論—瀬田貞二子どもの本評論集—』(以上、福音館書店)がある。また昭和34年(1959)には、浦和の自宅に家庭文庫「瀬田文庫」を開き、子ども読書活動の発展にも取り組んだ。昭和54年(1979)8月21日逝去。

令和元年8月15日発行

編集・発行 さいたま市立東浦和図書館



没後40年

瀬田貞二 を読む

~Book Guide~

さいたま市立東浦和図書館

児童テーマ展示
2019.8.15-8.25



今年は、さいたま市ゆかりの
児童文学者・瀬田貞二さんが亡くなって、40年になります。
ここでは、瀬田さんやその作品をより身近に
感じられるような本をご紹介します。

■瀬田貞二が考えていたこと

幼い子の文学 中公新書563 瀬田貞二著 中央公論新社 1980

瀬田さんが、児童図書館員を対象に語った1976年の講演を採録したもの。物語の分析や具体的な例が豊富で、瀬田さんの思考のエッセンスが詰まった一冊。なぞなぞや童唄（わらべうた）も取り上げられており、晩年の瀬田さんが雑誌に連載し、亡くなったあと単行本として刊行された『落穂ひろい』（福音館書店、1984）にも通じる、児童文化を広い視点で論じる姿勢がうかがえます。

児童文学論 瀬田貞二子どもの本評論集 上・下 瀬田貞二著 福音館書店 2009

様々な媒体で発表された原稿や講演録、インタビューがまとめられています。児童文学についての硬質な議論が収録されている一方で、瀬田さんの人柄がしのばれるエッセイやインタビューも。「夜間中学の教師だった私は、一応職場に帰るだろう。しかし、解放された機会に私は自らのあらゆる能力と時間を、子どもたちにむかって解放しなくてはならない。これからの時代は、子どもたちに期待するよりないのだから……」という、終戦を迎えた瀬田さんが当時の思いを記した言葉は胸を打ちます。（下巻収録「戦後の児童文学」より）

■瀬田貞二を読む

子どもと子どもの本にささげた生涯 —講演録 瀬田貞二先生について— 斎藤惇夫著 キッズメイト 2002

『冒険者たち』などの作品で知られる作家で、瀬田さんと親しく交流していた斎藤惇夫さんの講演録。瀬田さんの前半生を紐解きながら、斎藤さんの思い出も綴られていきます。

子どもの本のよあけ —瀬田貞二伝 荒木田隆子著 福音館書店 2017

「落穂ひろい」雑誌掲載時の担当編集者だった荒木田隆子さんが行った5回連続講演会を収録したもの。講演録とはいえ、瀬田さんの人生と、多岐にわたる活動を論じた評伝となっていて、編集者の目を通して見た瀬田さんが大変魅力的に描かれています。巻末には、瀬田さんのデビュー作で、のちに本多猪四郎監督によって映画化もされた『郵便机』（1949）も収録。

■瀬田さんの物語

お父さんのラッパばなし 瀬田貞二作 堀内誠一画 福音館書店 1977

ラッパばなしとは、ほらばなしのこと。お父さんが語る奇想天外な14のおはなしが収められた短編集です。挿絵は瀬田さんと親交のあった画家・堀内誠一。

きょうはなんのひ？ 瀬田貞二作 林明子絵 福音館書店 1979

「おかあさん、きょうはなんのひだか しってるの？ しーらないの、しらないの、しらなきゃ かいだん 三だんめ。」まみこはそうやって学校へ行ってしまう。おかあさんがかいだんを見てみると…。瀬田さんの生前最後に出版されたこの絵本、心がほっとあたたかくなります。